コラム
歴史に学ぶ

集落地図から昔を復元する

西之表市立図書館長　鮫嶋　安豊

このたび、井元孝章編著なる東町物語「タンタン川」が刊行された。出郷者や町内会員の思いを重々して完成したものである。これまで東町を知る文献は井元正流著「種子島今むかし」（大正時代）や村井忠幸著「回顧録タンタン川」（昭和初期）などがあったことから、本書は昭和三十年代以降の暮らしぶりがまとめられている。

めくるほどに、幼少時代、タンタン川（玉川）で遊んだダクマ獲り、エビナ釣り、夏祭りのことなど郷愁は尽きることなく、綴られている。近年、明治 20 年代の北種子村（西之表市前身）作成の営業届が発見された。

明治時代に入り、人々は中央から地方へ、地方から中央への大移動が始まったことが理解できる。それによると西町は、小間物屋（雑貨屋）91 軒、回漕業（海運業）15 軒、タンコ屋（桶屋）11 軒、紺屋（染物屋）5 軒などが軒を連ね、東町は、鍛冶屋22 軒、大工 18 軒、木挽き（樵夫）11 軒、樟脳焚き 8 軒、畳屋 6 軒、瓦製造4 軒、左官4 軒などあり、新しい商品を携えた商人たちや新しい技術を持った職人たちで賑わっていた。タンコ屋・石屋は金峰・阿多方面から、鍋や羽釜などの鋳物職人・ブリキ屋も鹿児島から渡ってきた。江戸時代、西町は商人町、東町は職人町として企画され、今日でもその名残が感じられる。西之表市も目下、市史編纂の中で、12 校区の村落誌を作成中である。私たちの暮らしは留まることなく、超スピードで変貌していく。人は誰しも、故郷に居ても郷愁が湧いてくる時がある。しかし、時の風化は容赦なくやってくる。後世に何を残すのか？何を残せるか？人々の記憶が失せぬ間に、後世に伝えていくことの大切さを痛感する。

明治 20 年代の営業届

古代部会
報告

種子島の姿が確認できる最も古い史料は、『唐会要』という中国の法律書で、654 年遣唐使が唐に伝えた「倭国の東海の島々の中に耶古･波耶･多尼の三国がある」という記事の中に見える「多尼」が、種子島のことであろうと考えられます。このあと、677 年には多禰島人が、はるばるヤマトまで出かけ、飛鳥寺の西にあった広場でもてなされており、この広場跡が、近年奈良県明日香村教育委員会によって発掘調査されています。702 年には、種子島･屋久島の地域が、多褥嶋（薩摩国や大隅国と同格の行政単位）として設定されました。多褥嶋の役人の勤務評定に関わる木簡が平城宮跡から出土しています。多褥嶋は 824 年に大隅国に併合されていき、12 世紀には、島津荘の一部となっていきます。古代部会は、永山と竹森友子氏で分担し、最新の考古学的知見も取り入れながら、南九州から南西諸島の歴史の中に、種子島の歴史を位置づけたいと考え、調査を続けています。

夜光貝のペンダントをつけた私

＜古代部会長：永山　修一＞

令和 2 年 12 月 25 日発行　第 3 号　［発行］西之表市［編集］企画課 歴史文化活用係
〒891-3193　西之表市西之表 7612 番地　電話 0997-22-1111（内 211）FAX 0997-22-0295

西之表市史編さんだより

第3号

『校区史』の調査をご紹介します

榕城校区

～池田浦『種子島の漁撈生活　中原太吉氏の日記』～

三ヶ浦を調べる課題を与えられました。さて！どうしたものか。まるで基礎知識がないのです。有難いことに池田の『種子島の漁撈生活　中原太吉氏の日記』をいただきました。船頭の方々の生活が見えてきました。天気・風に左右される漁業、命がけの仕事、その割に値が付かず苦労の連続。昭和 5 年の日記によると、出漁して捕れたのが 1 年で 80 日。漁場は、馬毛島が中心です。5 月・6 月は、トビウオ。10 月・11 月は、ザコ捕りに集中。魚の捕れない日は、網の修理、小屋の修繕、アバ（浮）作り、わら打ち、網の染め方等々、多忙を極めます。太吉さんのため息も書かれています。「魚が捕れねば、春磯渡しも見込みなし。嗚呼」妻トキさんも国上までも駄売りに出かけました。

楽しみもあります。春磯わたり。女性たちが馬毛島に渡り、賑わいます。小屋入り祝いに盛大な酒盛り、トビウオが 5 万尾捕れた時の喜び、イザケの賑わい、優秀な娘さん 3 人の学芸会、上之原への夫婦そろっての芋ほり、えびす様・本源寺の参詣、太吉さんのやさしさが伝わります。

少し基礎学習ができたところで船頭さん方のお話を聞かせていただいています。これから皆様のご助力で深めていきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

中原太吉 氏
（池島勇氏提供）

村川　元子（榕城担当）

伊関校区

～伊関校区 調査の概況～

伊関校区は、元々国上村の一部でありました。明治 15 年に啓明小学校が創立され、明治 22 年安納村であった沖ヶ浜田集落が通学の便宜上、伊関に通学することとなりました。また、甑島の手打、鹿島、静岡、与論島からの移住者によって現在の伊関校区が形作られています。明治時代の中頃、カシミア号の乗組員を救助したことを知ったクリーブランド大統領によって、その恩義に報いるために送られた 2500 ドルを、その時の大蔵郷大隈重信の指示によって教育資金として運用することとなりました。そのおかげで教育の充実、西京橋の建設等、多大な恩恵を受けました。離島の一寒村の発展に大きく寄与したと思います。昔日の先人の苦労があってこそ、現在の伊関校区が成り立っているのです。また、現在まで沖ヶ浜田や浜脇に伝わる塩屋牧の古文書も大切に受け継がれているようです。末永く引き継いでいくように願ってやみません。浜脇の正立寺の古文書の中には、元禄時代（約 330 年前）の仏教曼荼羅や口上覚等が残っています。明治の初めの廃仏毀釈のときでも、深く信仰を守り続けた人々のすばらしさに敬服するばかりです。そして、伊関校区の歴史を後世に残すために、行事・伝承・祭り・踊り等、そして昔のことを記した文書や写真等、伊関校区に生まれて育った人々のことを後世に伝えて行くために、どうか協力をお願いいたします。

正立寺縁起書（伊関浜脇）

榎本　澄徳（伊関担当）

中割校区

～石碑に見る中割の足跡～

中割地区は、大正３年１月 12 日の桜島大噴火の折、罹災した人々206 戸・約 1300 人が同年 3 月以降移住しています。また、ほぼ同時期に全国様々な地からの移住もあり、当時はほぼ人跡未踏の地であった林野を切り開き、かやぶき小屋で雨風をしのぎ、血のにじむような苦難の基にこの地が興されています。以下に、中割地区の石碑を紹介いたします。

〇桜島移住記念碑･･･大正 3 年 3 月 12 日、十六番、県道沿いの浜津脇入り口近くに、大正大噴火の折、移住を余儀なくされた方々によって望郷の気持ちを込めて建てられました。

〇向井 喜之助氏紀徳碑･･･昭和 13 年 4 月 4 日、十六番、県道沿いの十六番公民館横に建てられました。向井喜之助氏は、南種子平山より移住し農林業に従事、区民の支援により西之表町会議員に当選、区制の施行･実施等々、日夜地区の発展に尽力されました。

〇行幸記念碑･･･昭和 10 年 11 月、十六番、県道沿いの十六番公民館横に、男女青年十六番･砂中支会、国防十六番婦人会によって建てられました。また、万波のNPO法人こすも敷地下にも、大演習御統監行幸を記念し、萬葉小組合によって建てられています。

〇移住記念碑･･･大正 5 年 4 月 13 日、万波、旧村山商店前市道沿いに、万波集落に奄美大島･徳之島･与論･四国･宮崎などから多くの移住があり、集落の発展に尽力したことを記念し、建てられました。

十六番移住記念碑

みなさんも、石碑を巡って、先人や校区の歩んできた歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

奈尾　正友（中割担当）

古田校区

～紀功碑に思いを寄せて～

古田中央公民館の敷地内に紀功碑が建立されています。

天保 2 年（1831 年）8 月 8 日生誕され古田村の発展のため生涯を尽くした榎本新喜翁の功績を称えた石碑です。

明治 12 年（1879 年）土地改定の際、古田村の戸数は 27 戸、住民は 120 名程度と記されています。古田校区ではこの当時居住していた 27 戸の戸主を古有民（こゆうみん）と呼び、旧暦の 1 月 16 日にあたる日に山の神祭り並びに石碑祭りを開催し先人の功績に敬意を表し､代々受け継がれている肥沃の山に感謝し、後世へと繋いでいくことを誓うのです。古有民継承は 11 戸。明治の初期、古田村総代であった榎本新喜翁は、古田村が山間僻地できわめて小集落であること、耕作田園も狭小であることから、何としてもこの古田の地を開発発展させたいと考えました。そのためには多くの住民を招き移住させることだと確信し、実行実現のため固定資源が必要であることを副総代の高尾野利八氏へ相談し快諾されました。二人は残る古有民にも相談し、27 戸の古有民全員が固い決意で団結し行動に移しました。付近の山林の広区域を共有地に編入するように役所に要望しました。何度となく拒否されましたが、あきらめず請願書を提出し筋道を立てて説得し、ついに役所は熱意に負けて請願を許すのです。びっくりすることにその山林面積は実に 2 千町歩であったといいます。この時はのちの移住が現実のものになろうとは知る余地もないのです。将来を見据え今できることに住民が一丸となった努力の賜物であります。（果たして実際の面積はいかほどなのか、地籍調査の結果が待ち遠しい）

榎本新喜翁紀功碑
（古田中央公民館）

窪田　良二（古田担当）

鉄砲館で企画展を開催しています

市民の皆さまからご提供いただいた古写真や、地域でこれまで大切に受け継がれてきた古文書（こもんじょ）、調査の様子などをパネルにして、鉄砲館の企画展コーナーに展示しています。

市史編さん事業が進むにつれ、新しい資料が神社仏閣や個人宅から少しずつ「発見」されてきています。これらの資料を丁寧に読み解くことで、新たな歴史が拓かれるのです。地域の歴史が明らかとなっていくワクワク感をできるだけたくさんの方と味わいたいと事務局は考えています。各校区での出張展示やインターネット公開など、市史編さんの状況報告の場を今後も設けていきますので、お楽しみに！

ヤッコソウ（市指定文化財） ▸
国上郷土誌編さん委員会の調査により、現在も浦田小島に自生していることが確認されました。

▲立山の武田家に伝わる古文書のうちの１枚
「牧」で育成される馬や牛は、耳を一定の形に切って印が付けられたとされています。（これを牧印といいます。）この文書からは、立山野木牧の馬は右の耳を矢筈（やはず、V 字）形に切っていたことが分かります。イラストも添えられており、非常に貴重な資料です。

◂ サンシード建設時の１枚
故和田実氏ご提供。S57.11 月撮影。
市民の皆さまからご提供いただいた写真も多数展示しています。
ご提供ありがとうございました。

甑島からの移住文書　伊関正立寺に関する文書
上石寺塩屋牧文書　現和榎本家所蔵の文書
小学校所蔵古写真　ほか多数展示中！

本市に関する古資料も受付けています。
資料をお持ちの方は、市企画課まで是非ご一報ください！